

# 近世文学史家は誤っていないのであろうか

——近世後期上方文学に関連して——

島 田 勇 雄

一 は し が き

鬼面人を驚かせるような標題ではあるが、あえてそうしてみた。もっと控え目な標題を選ぶべきなのであろうし、私の好みから言えはそうしたいのであるが、あえてこのような標題にしてみた。時には、人の気を惹いてみるのもいいではないか、と考えてそうしたわけである。七十男の店仕舞い前の大売り出し用語と考えて下さればいい。ただし、当人には投げ売りの大安売りという了簡は毛頭ない。永い間近世文学にもかかずらわってきたので、その総括をするつもりでいるわけである。

たとえば、こういう解説がある。もつとも、これらはたまたま大学の図書館の近世文学の項の書架から任意にひき出した書物の例で、これをとねらいをつけたわけではない。当の筆者の方々には御迷惑をおかけをしなければならぬが、平に御有恕を乞いたいし、御異論のほどは後刻あらためて伺いたいとも考える。要するに、他の近世文学史家もほとんど同説であるに違いないと思われるのである。

甲 第三期 文運東漸時代 第一章 時代の概観

元禄文学が近松と西鶴とを擁して京阪の地に光彩を放ったことは、最早昨日の夢と過ぎ去った。水も動かなければ腐るの道理で、今や京阪の文芸は沈滞の極に達して、さきの千紫万紅の倅観は杳としてその影を没した。竹本・豊竹二座の操も衰微に帰すれば、八

文字屋本も旧套陳腐に陥った。然るに、江戸は新興の文芸を擁して起たうとする。京阪文運の移植に孜孜として力めることもここに數十年、漸く蕪雜粗笨を抛って、始めて文明の華に接しようとする。洒落本の祖たる「遊子方言」また説本の祖たる「本朝水滸伝」の刊行も、実に明和・安永の際である。また、江戸の淨瑠璃界に福内鬼外を得て、喝采の声の高く揚つたのも、この頃である。これ実にこの期をば地理上より見て、文運東漸時代と称する所以である。（永井一孝氏著「江戸文学史」、昭和十年）。

乙 目次 文化センター江戸 出版ジャーナリズム誕生（以下略）

全国文壇の統一 近世中期における文化史上の大きな流れは、文化の中心が上方から江戸に移るといふことにある。だがこれは、上方の文化が衰退したといふことではない。江戸を中心として、全国が文化的に統一されたといふことである。なんといつても日本は狭い。治世が続き、制度・経済・交通が発達すればなお狭くなる。政権の所在地である江戸が、やがて経済・文化の中心地ともなり、そういう姿で日本の文化が統一されて行くことは、まことに自然の成り行きであった。（『日本文学の歴史』8。

中村幸彦氏・西山松之助氏編「文化絳乱」。この項、浜田啓介氏、昭和四二年）。

甲と乙とは、近世後期に文化センターとして江戸が誕生し、その新興地によつて全国の文化が統一されたとする点では同じく、異るところは甲が上方文壇の衰退を言うのに対し、乙がそういうわけではないという点にあると言えよう。

永井氏の著は昭和十年の出版、私の学生時代のこと、私はある種の感銘をもってそれを読んだ。そして、以後數十年間、それ故に迷いに迷つた。苦渋に満ちた數十年であつたと言つてもよい。その結論に疑念を持って、それは通説となつていて、誰一人として耳を貸しそうな人もいない。今でもそうであるらしい。しかし、永い間かかつて私なりに到達した結論を申し述べて、大方の御叱正を得たいものと考えているわけである。

二

この際は私ことを少々申し述べるのをお許しただかねばならぬが、私は昭和九年に大学に入学した。前年公にされた菊沢季生氏

の「位相論」(「国語科学講座」)から感銘を受けてそれを終生の目標と定め、その調査を上方の遊里語から始めたが、その過程で近世上方語の口語資料の探究を行なった。説本・談義本や狂詩・狂文などの口語資料に遠いものは私の関心外にあったが、口語資料としてのものでできるだけ手広くあさった。演芸系のジャンルでは絵入狂言本・歌舞伎評判記・台帳・絵入根本・俄類・昭葉狂言・軽口、小説類では浮世草子・洒落本・滑稽本・笑本などである。その過程で、江戸文壇との差異についても若干考えるところがあった。即ち、通説を追認し、疑い、迷い、という経緯の上で、現在では通説は誤っているのではないか、という考え方を固めつつある。

近世後期の江戸文壇では、洒落本や説本や滑稽本が隆盛であり、洒落本の凋落のちは人情本がこれに代ったと言えよう。一方革双紙の系統では赤本―黒本―黄表紙―合巻といった変遷をたどるわけである。ところで、上方では初期の洒落本には若干の見るべき作品があったものの、その後は西村定雅(翠川子)の諸作や「箱枕」などのほかにはほとんど見るべき作品はないし、人情本に数えられるものは全くない。説本の嚆矢は上方の都賀庭鐘であり、その後上田秋成がいるが、以後人がいない。滑稽本と言えるものも全くないと言つてよい。そのような点を基準にすれば、たしかに文運東漸すと言つても当然のように見える。時には馬琴の作品に名を借りた歌舞伎が上方で上演されたこともある。先学たちもそのような点に対する留意から、近世後期において文運東漸すと断じたのであろうし、以後の文学史家たちも同じ観点からそれに賛同されて今日に至っているのであろう。しかし、そう断ずるにはいくつかの前提事項があるはずで、それらをふまえた上でそのように断定されたのであろうと思われる。というのは、それまでは明らかに上方文壇が江戸文壇より圧倒的に優位にあったのに、後期からはにわかに逆転現象が生じたと認定するには、それなりに確乎たる理由が在しなければならぬからである。それは確かに文壇的地位の優劣に関する判定に過ぎないけれども、その判定は単に特定のジャンルの若干の作家たちの動静のみから下されるべきものではなく、できるだけ広く可能なかぎり多面的にすべてのジャンルにわたる文学的活動についての考察の上で下されるべきものだからである。更にできるだけ深く可能なかぎり広く江戸文壇と上方文壇との地盤としての学芸・出版等を多面的に含む文化的現象全般にわたる考察の上で下されるべきものだからである。その点では、甲説が「水も動かなければ云々」という比喩でかたづけられているのに対し、乙説は遙かにゆきとどいている。それにしても、そのような結論に到達するためには、ともに

(1) 江戸は文化的現象全般において上方より優位に転じたこと。

(2) 江戸文壇では多くのジャンルにおいてすぐれた作家が輩出し、すぐれた作品群が多産されたこと。

(3) ところが、同一のジャンルにおいては上方では作家・作品とも劣位にあったこと。

(4) したがって、上方文壇が衰退し、江戸文壇が優位に転じたことと判せざるを得ないこと。即ち、文運東漸した、もしくはその結果、

江戸文壇が全国統一を實現したと判せられること。

というような思考過程、論証過程を経由したものと考えられる。ところで、(1)については、医学・本草学を中心とする明治前自然科学史等についての私の乏しい知識からしても、また儒学や蘭学についての常識的評価からしても、上方学術界が江戸のそれに対し劣位にあったとは到底考えられない。両者が並行関係にあったとさえ考えられない部門が多かったのではあるまいか。要するに、江戸は政權都市であり、消費文化の都市であったし、それに対し京都を中心とする上方は学術都市であり、生産文化の都市であった。そしてそれは幕末までそうでありつづけたし、文運東漸の動きは維新後東京に大学ができて、急激に西欧的学術を導入して旧来の東洋的学術を見棄てる風潮の高まるのに伴うものであり、したがって實質的に文運東漸の實現するのはそんなに早い時期ではないと考えられる。また、(2)(3)からいきなり(4)の結論を導くのは論理的に誤っていると考えられる。文運東漸とか江戸文壇による全国文壇の統一と結論するには、特定のジャンルにおける盛衰のみによって判定すべきではなく、文壇全体の総合的動靜に基づいて判定すべきであると思われるからである。ところが、それは全ての近世文学史家に共通に見られる現象と言つてよいのであるが、(4)のような結論を導く方法として近世後期に江戸文壇で流行し、江戸の読者層に好まれた落本・人情本・読本等のみを判定の基準として選び、上方文壇で流行し、上方の読者層に好まれたジャンルを無視している。その上で、江戸で流行したジャンルにおいて上方には匹敵するものが見られない。即ちそれは上方文壇が衰退して、文運の東漸したことを示すものであると判定しているわけである。それは論理的に不都合であると言わざるを得ないのである。

たしかに、近世後期の上方では、江戸ではやった洒落本・人情本・読本の類ははやらなかつた。そのことは疑いない。しかし、そうかと言つて、上方文壇が火の消えたように沈滞してしまつたり、水の腐つたような状態を呈したりしたわけではない。ただ、江戸

ではやったものが上方ではやらなかったということである。江戸人の好みと上方人の好みとが違っていて、それが文学活動に反映していたというまでのことである。つまり、その上方では江戸とは異なるジャンルで創作活動が活発にされていた。江戸文壇と上方文壇との差違を最もよく象徴するのは、近世後期の浮世絵における両者の差異である。松平進氏によれば、江戸で美人の大首物が流行して多くの傑作を生んでいた頃、上方では全くその種のは好まれなかった。しかし上方に浮世絵がなかったわけではない。上方でも浮世絵自体は好まれていた。ただ、題材の好みは江戸と上方では違っていて、江戸人が好んだものを上方人が好まなかったというまでである。上方人の好んだのは歌舞伎を題材とするもの、役者を題材とするものであったとのことである。これは近世後期の上方文学の動向を考えるにあたって重要な示唆を与えてくれる。

ところで、近世後期の上方における學術文化のことである。もっとも學術とは言っても、その中心は前期にひきつづき文藝的方面では儒学・国文学、理科的方面では医学・本草学であり、それ以外の天文学・数学の類は散発的でもあり微力でもあったと言つてよいであろう。なお、後期には右に蘭学が新たに加わるわけである。このほかの學術として全国的に盛行したものに兵法学がある。それは当初は戦争論であつたが、西欧の、たとえばクラウゼヴィツチの『戦争論』のそれと違ふ点は、早くから「軍礼」という独自の部門を持つことで、のち次第に儒教の影響を強く受けて倫理的実学ともいふべきものに変容する。これはいま除外しておくことにしたい。

儒学・国学については衆知のことなので省略したい。ただ次の二、三の点には留意しておきたい。一つは、京都の古義堂とは別に大阪にも町人の立場から儒学を研鑽した懷徳堂があり、それが今次の戦争中まで根強く機能していたことであり、他の一つは古義堂系の古学派に體質的なものとして反体制志向の感得されることで、それは仁斉の弟子であり、稲若水没後本草学の第一人者として目された松岡玄達にも見られ、玄達が幕府の要請に対し仕官拒否したことにも通じ、更にその弟子小野蘭山の屢次の仕官拒否に通じ、その風がなお伝統的に上方に継続していることである。それは上方の学界的體質の一つとも言えるもので、山鹿素行の如く同じく古学派の学者でも幕府への仕官を望んで種々画策した体制志向派とは質的に相違し、そこに江戸と上方との潜在的な差が存するのである。

近世の医学・本草学の学史的追求は日本学士院編の「明治前日本科学史叢書」の各編が詳しいので、その大体は省略したい。また啓

蒙的な食物本草においても、ほぼ上方学壇の方が指導的であつたと言つてよいであらう。

本草学の薬学的側面についてはすぐれた解説があるので今更言うまでもないが、そのわが国の学術に果たした薬学外の史的役割には必ずしもよく知られていないと言えない側面がある。そのようなものとして名物学的側面・物産学的側面が挙げられる。近世の本草学は中国本草学の批判的摂取の過程で次第に名物学・博物学・物産学を派生させる。名物学は博物学的対象について物と名との相関々係を実験的に検証する部門で、国文学の考証的側面と呼応する形で始まり、稻若水の「庶物類纂」一千巻の着手などを契機に考証学の一面を開拓したし、その過程で学名について東洋的学名としての漢名に対し和的学名の意義を解くに至る。博物学的部門では、稻若水の後継者と目された松岡玄達による品類研究以来部分的研究が充実し、明治になって西欧的生物学の導入される以前にすでにリンネの分類法を使用するまでに至つていた。また「庶物類纂」のための調査が契機となつて物産学の興隆をきたし、各地における物産会の開催のほか諸国の物産研究を隆昌ならしめた。それらの諸学の中心は上方であつて、江戸ではありえない。

蘭学においては、幕医における蘭方外科の伝統等から江戸蘭学は強力であつたが、それも圧倒的に強力であつたと言えるほどでない。つまり、江戸は、漸次変質していったと言え、要するに政權都市であり、そのための学芸の都市であつて、それ以外の学的部門では、必要となれば本草家の小野蘭山に強請し、蘭学者緒方洪庵に強請し、天文・曆学者たちに要請したように、上方初め各地から学者たちを呼び寄せるというふうで、江戸は幕末まで学術都市としての体質を十分にもちあわせていたと言えない段階にあつたと留つてよいと思われる。

それでは、上方は学術の中心都市、江戸は文芸の中心都市であつて、それぞれ文化的機能を異にする都市であり、文化的には二者並行関係にあつたと言ふべきかというに、申訳ないが、江戸文壇に対立する上方文壇が別にあり、文壇的に両文壇が並存関係にあつたと私は考えてみたいのである。江戸で好まれたものとは異なるジャンルの作品が上方では好まれ、そのような作品群を上方では成育していた。その意味で、両文壇は並存段階にあつた、それはちやうどある時期の浮世絵における並存関係に同じいものと考えたいのである。

その上方特有のジャンルについて述べるまゝに、同一ジャンルの作品においても江戸と上方との伝統が相違することを断本(軽口

本)を例に述べておきたい。私のかつての調査では、上方版の軽口本の所蔵者は、公的機関としては東大国語研究室が第一位で国立国会図書館がこれに次ぎ、私人では宮尾しげを氏が第一位である。もともと江戸版の方は未調査である。版型・冊数では両者に著しい差異が見られる。若干の例外を除けば、上方では版型で半紙本大、巻数で五巻物が多い。これに対し江戸版は、小本仕立の一巻物が多い。なお、喃本(軽口本)の書目は山崎寛氏の「日本小説書目年表」(『近代日本文学大系』)が詳しいが、上方版については相等数の脱漏をまぬがれていない。版型等の相違は、江戸と上方との出版文化の異質さを示すものと目える。なお、軽口本におけるこれらの差異はある時期以後の両者の洒落本についても妥当する。

既述したように、浮世絵において、江戸で美人画の大首物が流行した頃、上方ではそれに対し上方風の役者絵が流行したが、それは上方文化の性格を端的に示唆するものと目える。私がそのことを感じるようになったのは、近世後期の上方の口語資料を求め、洒落本・軽口本などと手を広げていったのち、歌舞伎系の資料を探求するようになってからのことである。私は並木正三の作品を中心に上方歌舞伎の台帳・評判記類を求めた。そのようなものをまず東大の国語研究室で見ることができた。ついで国会図書館・阪急池田文庫・天理図書館にそれがあつた。東大本は上田万年博士が名古屋の貸本屋大惣の台帳を購入しておかれたと聞いたことがある。大正一二年の震災に東大に火の手が及んだ時、消防隊によつて救われたとかではあるが、多くは水をかぶつたため団子状になっていた。ただ注意して根氣よく剥がしていけば、日本紙の有難さに一枚々々剥がれるものがある。そのようにして相当数を利用できるようにすることができた。ただそのことでわかつたことは、それらの大惣本の台帳を震災後に利用したのは私が初めてであることで、並木正三の作品について先学が論致をものされておられるが、それらは大惣本の台帳に基づいたものではないこと、おそらく「並木正三代喃」(天明五年刊)などの記事に基づいたものであろうなどのことに気づいた。「並木正三代喃」は正三の十三忌の天明五年のものであり、その記事を番付と照合すると、筆者の記憶違いによるかと思われるものがある。そのこともあつて、正三について書き始めたが、以後淡路の人形座の隠語の報告にかまけて中絶してしまつた。

その頃調査した並木正三の作品は所蔵フィルムからすると次の如き作品であつた。「国書総目録」刊行以前でもあり、歌舞伎作品にはふなれなこともあつて、同一作品の資料を広く集めて処理することなどはなしていなかつた。(なお、台帳所蔵機関、東大は東

大國語研究室、国会は国立国会図書館、池田は池田文庫、天理は天理大学附属図書館。

けいせい天の羽衣(宝暦三年、国会) 天竺徳兵衛聞書往来(宝暦七年、池田)

四天王寺伽藍鑑(宝暦七年、東大) 傾城飯綱八文字(宝暦八年、東大)

三十石船始(宝暦八年、天理) 大阪神事摘(宝暦九年、東大)

霧太郎天狗酒盛(宝暦十一年、東大、二部) 竹篋太郎怪談記(宝暦十二年、東大)

大阪日記垣長次郎(明和四年、東大) 桑名屋徳蔵入船物語(明和七年、東大・池田)

正徳年中 淀屋橋喧嘩(明和七年、池田) 一休咄(明和八年、東大)

近江源氏轡講釈(安永元年、東大) 三千世界商売往来(安永元年、東大、二部)

日本第一和布刈神事(安永二年、池田)

並木正三の台帳の調査を行なった頃、上方の歌舞伎の台帳もできるかぎり調査した。それは本来近世上方語の口語資料を調査することが私の意図であり、その一端として並木正三の台帳も調査したのであり、事実並木正三の作品以前の台帳も多く現存するからである。そのようなものとしては『元禄劇篇』に復刻された宝永の「心中鬼門角」がすでにあり、以後もこれに続く作品が多く現存している。それらで私の調査し撮影したものを次に挙げておく。それは昭和五十六年度の国語学会が本学で催された際、おそらくかつての私と同意図からであろうが、私と同様に上方の台帳を十件程調査して、それらが純口語資料とは思えないとした報告があったからである。私が二十数年前にそのことを報告しておいたならとくやまれたからであり、また別の意図で上方歌舞伎を調査される方がある場合、その参考にもと思うし、それに『国書総目録』に洩れたものもあるからである。

黒船出入湊(享保三年、池田) 傾城建仁寺供養(享保九年、天理)

島原小蝶菜種紋日(享保二〇年、東大) 伊勢海道銭掛松(天文三年、東大)

薩摩節五人切子(元文年中、池田) 大門口笠襲(寛保三年、東大)

傾城花街蛙(宝暦六年、東大) 傾城鎌倉山(宝暦八年、東大)



秋葉権現廻船話（宝暦十一年、天理・池田）

傾城陸玉川（明和四年、東大・池田）

三ヶ津神事評判（明和四年、東大）

浮名時花歌（安永六年、東大）

天満宮菜種御供（安永六年、東大・国会）

けいせい稚子濁（天明二年、池田）

七宝浜真砂（天明三年、池田）

蒔時大津絵（天明三年、池田）

義臣伝説切講釈（天明八年、池田）

けいせい青陽鞆（寛政六年、東大）

五大力恋緘（寛政六年、東大・国会）

島廻戯聞書（寛政六年、東大）

花楓秋葉話（寛政十一年、国会・池田）

なお、「けいせいあらし山（元文四年、天理）を洩らしたが、以上のほか「樓門五山桐（国会）。けいせい玉手綱（祐田）・拳廻廓大通・思花街客性（東大）・山崎与次郎婉久松山恋（東大）・高台橋諍勝負付（池田）・五大力替竜虎（国会）・御ぞんじ五大力（国会）」なども撮影した。そのほか芸術大学の評判記や番付類も撮影した。番付や絵本番付も若干集めたが、これらは処分した。

口語性の強いジャンルに洒落本・軽口本のほかに俄本がある。当初は江戸の地口合に近いものであったらしいが、次第に演劇性を強めて、現代の上方軽演劇に接続する。その初期の刊本には、

消神秘録（宝暦六年）・古今俄選（安永四年）・風流俄天狗（天保三年・十二年）・照葉狂言俄早合点（安政二年）・智恵輪俄選（弘化五年）・風流仁和歌狂言（刊年不明）

などがあるし、そのほか一口俄の類が量産されたが、その書名などは省略する。俄のほかに照葉狂言と称するものが上方で行なわれたが、これは口語性が弱い。なお俄の類は山崎蘆氏の『日本小説年表』にも一点を除いて他は採録されていない。

俄・照葉狂言の類は江戸では行なわれず、上方だけに行なわれたものであり、それ故に現代の研究者に無視または軽視されたジャンルであるが、その類がなお一種ある。絵入根本である。この類も山崎氏の年表に洩れている。絵入根本の近世上方文学史上の位置を論ずるほど、私はこれに習熟していないが、上方人の歌舞伎好きに合わせて評判になった歌舞伎作品を、おそらく台帳に基づいて、読み物にしたものと思われる。もっとも台帳と根本との相互関係についてはまだ十分に調査していない。上演の時の配役を挙げ、上

演時の舞台を示す挿絵を添え、セリフのあとに卜書きを加えてある。形式的には台帳に基づいてそれを読み物風にしたという趣である。初期のものには二、三冊のものが見られるが、のちには二編十二冊という大部のものも見られる。多くはそれらが歌舞伎に上演されたより遙かに後であり、ことに河内屋太助の刊行物には天保十三年の刊とするものが多い。それからすれば、浮世絵における役者絵と軌を一にして、上方に歌舞伎の旺盛となる風潮に合わせてつきつきと出版されたものと思われる。それは俄類出版の盛行、おそらく上方軽口本の盛行もそれと無関係ではあるまいが、幕末時における上方文壇の特徴を示すものと思われる。

私が絵入根本の存在に気づいたのは台帳を調査し始めてからのことで、その頃はすでに最終バスの発車以後と言つてよい頃で、私はずかしく十数点を所蔵するに過ぎない。私の調査では次のような作品がある。門外漢の私の調査なので、多くの脱漏があるであろう。それでも少くともこれくらいはあるという意味を含めてそれを次に挙げる。なお刊本について複数の刊年のあるものはその初版の刊年のみを挙げる。

絵本（戯場）壁（び）生草（せいそう）（四冊・文化五年）・絵本浦島年代記（五冊・天保八年）・絵本川崎音頭（五冊・文化三年序）・絵本（戯場）菊の戯（くき）（二冊・文化元年）・絵本黄金鐘（八冊・文政三年）・大門口鎧襲（七冊・文政九年）・お染久松色紙版（五冊・天保二年）・霧太郎天狗酒宴（七冊・文政六年）・契情天羽衣（七冊・天保二年）・傾城築紫鞆（二編十一冊・弘化元年）・契情宮伝授（六冊・文化四年）・けいせい遊山桜（二編十三冊・天保十年・十一年）・戯場百葉草（五冊・享和三年）・春景浅茅原（五冊・文化五年）・忠臣連理鉢植（二冊・享和三年序）・文月恨切子（四冊・天保十三年）・百千鳥鳴門白浪（七冊・文政十三年）・役者浜真砂（六冊・享和三年）

なお次ぎのものは絵入根本の存疑本として考えられる。

秋葉権現廻船語（五冊）・暁朗浦の朝霧（四冊）・伊勢音頭変寝剣（三冊）・絵本かしこの紅翅・絵本初矢倉・鐘踏行夢の蛟鯨（三冊）・五大力恋絨（二冊）・新版歌祭文（三冊）・俳優倭草紙（二冊）

以上のすべてを赤本的存在として軽視もしくは無視することができないわけではないが、量的な多さからそれはできかねよう。これらはかぎられた出版社によるものであり、これらの好まれたのはほんの一次的であるかも知れない。しかしそれだけの理由でこれ

を無視することは許されぬと思う。その意味で近世後期の上方文壇を評価する際にはこのジャンルの存在を考慮せねばならぬと私は考える。

思うに、上方の演劇界では、近世前期における浄瑠璃の隆盛によって歌舞伎界は沈滞の状態にあったが、並木正三の出現によって息を吹きかえした。また続くその一門の才人たちによって浄瑠璃と歌舞伎とは形勢が逆転した。しかし、それも歌舞伎のマンネリ化の進行する中で次第に衰退し、俄などの軽演劇という新部門に観客の関心が移った、という経緯を通つたと思われる。現在の上方の軽演劇がそれを受けて絶頂にある段階と言えらるかも知れない。絵入根本の存在はそのような上方の演劇界において歌舞伎時代の絶頂期の締め括りを現わすものかとも思われる。私はこれをどのように位置付けたい。

以上略述したように、上方文壇には江戸文壇には無いジャンルが存していた。それは簡単には無視できないものであると考えられる。それらのジャンルが醸成するのになぜ上方文壇が水の腐つたような状態にあったと評されることになつたのか。それを地方文化の蔑視とかなどと言いたてるつもりは私には毛頭ない。要するに上方文壇の事情に聞い東京の文学研究者が江戸文学本位の結論を導入され、それに対して上方文壇に詳しいはずの関西の研究者が積極的な否定をしなかつたので、その論が次第に学界の通説となつて今日に及んだのである。そういう意味ではこれは明らかに関西の近世文学界全体の責任といふべきである。おそまきながら、文学を専門外とするものであるものの、永い間これとのかかりを持ってきた一人として通説に対する逆提案をしておきたいのである。

これについて想起されるのは、日本語史の通観に対してなされた安藤正次博士の方法である。安藤博士は『国語発達史序説』（明治書院、『国語科学講座』）で、日本語の変遷を、国語の成立期、国語の初代と大化の改新、集中・偏在の時代、分散・均等の時代、二元・対立の時代の五期に分類された。近世のなか頃に江戸語が成立して、近世後期は江戸語と上方語との二元・対立の時代にはいつたとされたのである。言語と文化との関係などということらしいことを持ち出すまでもなく、文壇的にも右述のように過渡的現象にあったことは明らかなので、近世後期をもって文壇的にも「二元・対立の時代」であつたと解釈してはどうであらうか。これが本論における私の意図である。

以上が、永い間近世文学にかかずらつてきた私の近世文学への第三の問題提起である。第一は「好色一代男」などの西鶴本に關す

私の提案であり、第二は近世初頭の説話物についての私の提案であり、これが三番めの提案である。第一では、「好色一代男」の成立について、通説が書きおろし説を取るのに対し、私は細部的分析に基づいて、谷脇理史氏の論を発展させて、事前に書きためてあった転合書を編集してまとめたものとの説を出し、これを編集説と命名した。もともと、これは編集・編纂・総纂と数段階の方法を経たものと補強することになっている。そのほか、「好色」を非ボルノとする解釈、世之介非主人公論、西鶴の修辭法の展開と順次問題を拡大しているし、西鶴本の中で外部徴証から西鶴作と証明できない「好色五人女・好色一代女」などの多くの作品を「伝西鶴本」と命名し、これらをあらためて内部徴証から検討すべきことを提案している。

第二は、近世初期の説話について「武辺咄・板倉咄・鳴導咄」など従来ほとんど留意されていない種類の見られることを述べたもので、これらも以後の近世文学の展開を考察するうえで留意されるべきものであると考えている。第三として本稿の如きを提起してみたい。この可否はともかくとして、これで永年にわたる気がかりなことが取れて嬉しい気持で一杯である。

ただ引用文によって御迷惑をかけることになった方々には深くおわびを申し上げます。

注 (1) 杉本勲氏「近世実学史の研究」、源了円氏「近世初期実学思想の研究」等。

(2) 『明治前日本医学史』全五巻、『明治前日本薬物学史』全二巻、『明治前日本生物学史』全二巻。

(3) 『食物本草大成』全十二巻(昭和五年、臨川書店)。

(4) 拙稿「近代の語彙II」(『講座国語史3』、『語彙史』)。

(5) 拙稿「並木正三の歌謡伎作品」(『水門』二号、昭和三八年)。

(6) 拙稿「近世説話の表現」(『日本の説話』?)。

〔追記〕最終校正の段階での和書整理中に、根本風の上方面説本類が若干出てきた。この類の存在には当初から気づいてはいたが、つい書きもらしてしまった。

今は、追記に留めておく。